

亀井孝先生と共にあった日々

田 中 克 彦

永年にわたり本学会の評議員をつとめられた一橋大学名誉教授、亀井孝先生は、1995年1月7日永眠されました。享年82歳でしたが、先生は文字どおり致命的な病魔とのたたかいを、大手術によって乗り切れ、25年間の健康を維持されてきたことを思えば、おそるべき体力と精神力の持ち主だったと言えましょう。その間、若い人たちに対しても特別のいたわりを求めることなく、たびたび後進の話し相手になっていただいております。

先生は1912年、西洋史学者亀井高孝氏の長男として東京にお生まれになり、慶応義塾幼稚舎、武蔵高等学校で学ばれた後、東京帝国大学文学部に進まれました。

幼稚舎で過された、いかにも楽しそうな思い出は、くり返しようがいました。同窓に後年名歌手となった藤山一郎、鬼才岡本太郎があり、先生は十歳を出たばかりのお年で詩集をお出しになり、それに岡本太郎が曲をつけ、藤山一郎が歌ったレコードがあるんだと何度かうかがっていましたが、詩集は見たものの、レコードはまわして聴いたことはありません。

高等学校では同窓に劇作家の飯沢匡（本名：伊沢紀^{ただす}）があり、この方との交友もよく話題にされました。大学への進学をひかえたころ、イザワ氏は、「カメイ、大学へなんぞ行くのはよそうよ」とさそわれたので、先生もその気になって、さっそく父上にその決意を表明されたそうです。御父上はややあって、「ばかもの、イザワのように才能のあるやつは学校に行かなくてもいいが、お前のような普通の人間は大学に行くしかないぞ」とたしなめられたそうであります。このエピソードは、私のみならずおそらく多くの方々が聞かされたことでありましょうし、また先生のこうしたせりふは、決して額面通りに受けとれるものばかりではありませんが、先生の芸術家的感性へのあこがれがいかにか強かったかを物語るもので

ありましょう。

大学へはひたすら橋本進吉を慕ってすすまれ、国語学を専攻されたことは、これまた多くの方々が述べているところです。先生のフィールドは、何と云っても日本語史であり、しかも極めて批判的、懐疑精神を前面に押し出したフィロロギーでありました。

先生はいわゆる国語学者でありましたが、橋本進吉還歴記念論文集にお寄せになった若いときの論文は、「共時態の時間的構造」と題されているところからみましても、先生がいかに関一般言語学の基本問題に熱中しておられたかがうかがわれます。

亀井先生が、ソシュールが持ち出してきた共時態と、歴史のいとなみそのものとしてのなまの言語とのアポリアの問題にいかに関深く沈潜されたかは、あとで見ると、極めて若い時代に発していたことがよくわかるのです。

1958年、私が先生の学生となった最初の年に、Cours をていねいに読んでいただいたことは、私の一生の財産となりました。その201ページ、下から10行目にある、《……, alors qu'il ne l'est pas dans sa première partie.》の pas は que でなければ話が通じないと指摘されました。その時私が用いていた Cours は1955年の版でありましたが、何度も重版されているのに、このように重大な誤植が放置されているヨーロッパの出版のおおらかさに驚くとともに、先生の強靱な批判的読書力にあらためて感服したのでした。

Cours の訳者小林英夫は、その訳本『言語学原論』(第8刷1953年)の「訳者の序」でこの日本語訳の誕生に、亀井先生の貢献が大きかったことを述べていますが、この pas が que であるべきだという問題にはふれていません。ところが、後に『一般言語学講義』(1972年)として新訳があらわれたとき、de Mauro の注釈つき Cours に、この pas は que の誤植であるとの指摘に言及しつつそれを受けて、はじめてこの新訳の序文にそのことにふれています。亀井先生はそのことを、日本人は西洋人が言わなければ信じないもんだとお話になっていましたが、私もまた、マウロに二、三十年も先がけてそのことに気づいておられた亀井先生に訳者が言及しないのはフェアでない態度だと思ったものです。

先生は虫の喰った本を山と積んで、それとわたりあう本物のフィロロギーであ

るとともに、いつも言語学の最前線のところを見ていたいという野心家でした。それどころか、先生の理論への野心は、言語学にとどまらず、社会科学の領域にも及んでいました。勤務校が一橋大学という環境のせいもあって、名だたる社会科学家たちを相手にまわして論戦をくりひろげておられるのを見て、たいへん頼もしく思ったものです。先生は講座や学科という、専門家として護ってくれるありがたい安全壁のまったく無いところで、いわば荒野の一匹狼として言語学をやっておられたのです。言語学は社会科学の中でどのような地位を占めるべきかというような問いに、いつも答える準備をしていなければならなかった先生にとって、もしかして平穩無事にまもられた国語学科、言語学科の防波堤の中に逃げ込みたいというお気持ちが時に働いたこともあったでしょうが、私としては、まさにこのような先生の境遇が、独得の味わいを帯びた学風を創り出したものと考えています。

この文脈で、世俗のことで、企ててもあまり成功しなかった先生の、例外的な成功と社会的貢献にふれておかねばなりません。

戦前の日本には、言語学の教授ポストを擁する大学は、有力な帝国大学を除いては極めて稀でありました。ところが、戦後全国の多くの新制大学で言語学の授業が行われるようになったのは、外国語科、国語科の教員免許を取得するための必要単位に指定されたところにその発端があったらしく、またそれはアメリカ占領軍の指示によるものだったと言われています。しかしこの指定は数年間維持されたのみで、1960年頃にはほとんどの大学から言語学の授業は撤退しました。言語学は必要科目からはずされたためです。（一説によるとそれは、英語科、国語科の利益をまもろうという教師たちの陰謀によるものだったそうです。）それにもかかわらず、もと商科大学であった一橋大学には言語学が定着し、今日に及んでいます。これはひとえに、言語学そのものというよりは、亀井先生の学問が、同僚から深い尊敬の念をもって仰がれていたことによるものです。

亀井先生は、学究として出発されたその初発の地点において、その研究領域で大きな葛藤をかかえておられました。その葛藤は、先生御自身から出たものというよりは、日本の学問的風土のしからしむるものでした。すなわち、ひとしくことばを対象としながらも、国語学と言語学という、異なる精神的背景をもった領

域への分裂です。先生が、この両者のいずれからもへだたることなく、いずれにも身をおく緊張に耐えながら、いわば天と地との間を往来された姿は感動的だったとさえ言えます。そういうお気持ちを表わされたのが、かの「^{リキヤコ}李莽湖」なる筆名であります。君これを逆に読んでごらんと言われたとき、私は、一般には否定的なニュアンスで受けとられているあの寓話の動物が、先生にとっては決して自嘲的ではなく、むしろ一種の気どりとして用いられているのが感じられたのです。

私は先生にとって当初から従順な学生ではありませんでした。それにすぐさま、田中はマルクシストだと内報した者がいたらしく、そのことが私に対して先生を身がまえさせる結果になったらしいのです。この内報にもついで、先生は私が教条主義者であると判断されたらしく、一緒に読もうと提案された言語学の著作はことごとく、教条を引き出すことはおろか絶望的にもやもやしたものばかりでした。あの明晰さを愛される先生が、なぜ、こんなもやもやした著作にむきになって時間を費されるのが不可解でした。政治的な教条はともかくも、ブルームフィールドやその垂流の明快な記述言語学の教条にしばられていた私は、あたかも脱皮を重ねるようにして、先生のもやもやの中にひきずり込まれて行くのを感じました。先生も、君の順調な発展をおさえてしまった責任を感じているなどとおっしゃることがあり、まるでその埋めあわせをするかのようになり——と私には感じられたのですが——日米安保条約反対のデモに加わられるようになりました。1960年6月15日、樺美智子が死んだときのデモには先生も加わっておられたのです。こうした大衆行動の列の中に先生の姿を見出すのは、いかにもそぐわぬ気もしましたが、これこそは先生の本性に内在する、例の芸術家志向の表われでした。突如、理をこえた場所に身を置いてみることに冒険的な喜びを感じるというところがあったのです。先生は今から10年前にカトリックの洗礼を受けられました。その頃、人間が作りだしたものの中で一番すごいものは、君何だと思うかねと問い出され、それは宗教なんだ。学問なんかとは比べものにならないとおっしゃったとき、私はあまり共感はしなかったものの、先生に人間としての深さを感じました。

私は先生のそうした一面を、一度世俗的な場所で引き出したらおもしろいだろうと、いたずら心をはたらかせていました。先生の論文を読まされる者には、あ

の文体をほめそやす人も少くありませんが、へきえきさせられると正直に告白する人もまた少なくないのも事実です。文体論争は、先生と私との間に横たわる確執の一つでした。先生は、君に文体を論じる資格なんかないよ。そもそも、「体」そのものがないんだから、などと気持ちよさそうに言い放たれるのでした。そこで私は、先生の文章は、ある状況のもとでは全く役にたたない。すくなくともアジビラには使えませんと申しあげたところ、先生はその指摘をことの外よるこぼれて、田中はおれの文章はアジビラにならないとほめてくれたよと吹聴なさった上に、それをお書きにまでなっているのを見て、私は何とということだろうと思いました。

しかしその後、先生の文章は、私たちが見ているようなものばかりではないということに気がつく機会がありました。1969年、大学の欧文紀要に *Beobachtungen eines Philologen über die Tennoherrschaft — Zum 100-jährigen Jubiläum der Meiji* という長い文章が現われました。これは1967年から68年にかけて、ベルリン自由大学で行われた講義とのことです。私はこれを一読して、いつものようにこってはいるが、たいへんわかりやすく書かれているのに驚きました。先生はドイツ語だと、こんなにわかりいいのに、日本語はどうしてあんなふうになってしまうのでしょうかと申しあげたところ、そんなに言うんだったら、君訳してみろよと言われたのです。私はずいぶん時間をかけて、400字で250枚をこえる訳稿を作りました。明治百年を記念して、ドイツの学生に、近代日本の天皇教と国家主義の成立を教え、その際に行われた政治セマンティックな操作を文献的に実証したものです。とりわけ、ミカド、テンシサマ、クワウテイ、コクワウなどの、当時通用していた語を押しつけて、「天皇」という語が創出され、ひろめられた過程を述べたくだりは、日本の読者の目にふれさせないままにしておくのは惜しいと私は考えたのです。そこで全く私流のやり方で全体を36枚にまとめ、「天皇制の言語学的考察——ベルリン自由大学における講義ノートより」と題して、1974年8月号の『中央公論』に発表したところ、思いもかけず多くの人々の注目を集めることになりました。私は寺杣正夫なるペンネームを使った末尾の解説で、これが翻訳であるとはっきりと述べておいたのに、多くの人は、そこを讀まずに亀井先生御自身の文章だと思ってしまったらしいのです。

先生の幼少年時代からをよく知っているという野上弥生子は、発刊直後の7月17日の日記にこう記しています。「午後三枝子に亀井孝氏の「天皇制の言語学的考察」（中公）をよませて置く。いかにも彼らしい鋭い批判に加へ、立派な文で頭を下げる」とあります。日記にこのくだりがあることを教えられたのは最近のことではありますが、前半部は同感しながら読んだのですが、末尾のところでは顔が紅くなるのを感じました。弥生子はさらに7月29日のくだりには、来訪の客と「いろいろな話、孝さんの「中公」の論文のことももとより話題になる」と繰返し称賛のことばを記しています。

私が上のような称賛のことばがあると知ったのはほんの最近のことです。しかし先生御自身の耳に到達しなかったはずはありません。こうした世論の外圧があったからでしょう、はじめて先生は、まじめに私の文章をお読みになられるようになったと想像されます。くわしくは述べませんが、先生はその後、気の毒なほど視力を弱らされたにもかかわらず、いちいち私の文章を読んではいぬいに、心のこもった感想を書き送っていただきました。

今思いかえてみると、ちょうどその頃と一致するのですが、当時岡山大学に在った私に突然E・コセリウの *Sincronía, diacronía e historia*, “El problema del cambio lingüístico” のコピーを送って来られ、これを訳してみろと誘われたのです。先生と私は、この本の真の共訳を行いました。私が東京にもどってきた1976年から5年ほどの間、訳稿をはさんで何十回もお会いし、どれほど多くの時間を過したことでしょう。そしてこの翻訳をすすめる間に、先生がいかにヘーゲルを深く理解されているかも知りました。先生の学識を尊敬する思いはいっそう深まったのです。この作業は翻訳ではありましたが、それを通して先生が抱かれたソシュールの共時言語学に対する批判の最終的な到達点に近いものであることもわかりました。ところで私は、先生より以上にコセリウに傾倒する結果になってしまったため、「君も困ったもんだ。それでよくマルクシストやってたな」と意地悪なことをおっしゃったのでした。この作業を通じて、亀井先生という「人間」を、ますます深く知ることができたのです。

コセリウの論旨のつまるところは、言語とは、ソシュールの言うように、「社会的事実」として話し手に課される盲目の強制ではなくて、目的をもった自由の

いとなみであるという認識であります。

このたび、この一文を草するにあたって、あらためて先生の論文集に目を通してみて、驚くことが一つありました。先生が24歳の若さで発表されたごく初期の論文、「文法体系とその歴史性」において、言語を「もの」、「道具」とみる言語観にふれた個所で「……しかし歴史的世界は有目的々に統一せられた自覚的な世界であり、道具の存在は道具の有する目的によってのみ初めて価値づけられている筈である」と鋭く指摘されております。またワルトブルクの論文にふれて、その趣旨は、「体系が新たな変遷に対して有する推進（Antrieb）を読みとらなくてはならない」という点にあり、その「推進とは、ここにおいてか、自由なる推進、一層譬喩的には自由意志とみられる」とした上で、「文法記述の最後の目的もまたこの解明に連るといふべきであらう」と結論づけておられます。私は24歳のときの亀井先生に、コセリウと同じ発想があったことに驚き、これこそは、先生が、コセリウの背景をなすロマニスティックに対する深い教養に培われた思想だと思った次第です。私はそれで、いかなる言語を対象に選ぶとも、人はロマニスティックの思想とその全盛期をかいくぐってみるねうちがあると思うようになりました。

私が先生の最後のお話を聞く機会があったのは、昨年6月10日のことでした。この日、私は先生に日本の国語学と言語学のイデオロギー的性格というようなことでインタビューを行い、その内容は『現代思想』8月号に掲載されました。その中で先生は「時枝さんは日本の国語学の歴史にすえれば、もう一度上田精神に戻ったんで、橋本進吉の方がそういう意味では日本の伝統では異端なんです」とおもしろいことを言われました。私はこういうことばじりをつかえまでは、先生に何度もインタビューをくりかえし、20世紀日本における言語学イデオロギー研究の資料を残しておくつもりでございました。

あの時先生は、まことに自由闊達に話されました。「いまのうちに話をうかがっておかなければ」と前おきしたとき、「君はぼくがすぐにでも死ぬと思っているのかい」とおっしゃったので、私はあわてて、いやそういうわけではないんですがと言ったのおぼえています。今にして思えば、「そうです、先生はまああと数年しか持たないでしょうから」と口に出かかったその通りをお答えしてお

けばよかったと思う。そうしたら、先生は例のごとく私をにくむエネルギーでもって、もう少し長く生きられたかもしれません。

私はここで型どおり、静かに御冥福をお祈りしますとでも結べばいいのでありましょうが、まだ多くのことを語り終えないうちに、永遠に私たちの前から立ち去ってしまわれたことで、口惜しいという思いの方が先にたってしまうのです。

この追悼の文は、日本言語学会事務局のもとに応じて書かれたものですが、そのもとの趣旨をはみだしているかもしれません。また一つ一つの思い出話にも誤まりが含まれているおそれもあります。しかしそれでも私の心に残された先生との思い出の糸をたぐり寄せ、亀井孝像をなるべくありのままに映し出そうとつとめました。先生の生前に話し足りなかったことどもが、日のうつるにしたがっていっそう痛切に思い出されます。私のみならず、多くの人々が先生との語らいを思い出してなつかしみ、また先生の御著作をひもといては、さらに対話をつづけて行くことでありましょう。